

大都市圏における子ども・孫・親戚とのサポートネットワーク ——ひとり暮らし高齢者及び夫婦のみ世帯の高齢者を対象として——

奥山正司

はじめに

老年期における高齢者の身体的及び精神的能力と自立生活は、個人差の大きいことが知られている。それは、卒寿（90歳）を過ぎてもスポーツや趣味・社会活動を行っていたり、講演をしている者もいれば、60代にして、寝たきりになっている者がいることに端的に示されている。

そうした高齢者の自立生活が老年後期（後期老年期）まで維持され、またその期間の長短への影響は、これまでの研究によれば、社会学的・心理学的・医学的等のさまざまな領域にまたがっている。（柴田・杉澤他、2003）。

ところが、こうした要因について、高齢者を対象とした縦断研究はほとんど見当たらない。われわれ研究プロジェクトチーム（国際長寿センター、2005）は、Byrets, T. (Byrets, T., et.al, 1972) が作成した個人要因と環境要因の相互関係に関する $B=f(E, P)$ という単純な式を視座 (Byrets, T, 1972) にし、下記のような関連図をつくったうえで、高齢者の日常生活に関する総合的な調査研究を行うことにした。

Byrets, T. によれば、B (behavior) には、顕在的な行動と潜在的な行動が含まれ、E (environment) には、物理的な環境と社会的な環境の両者が含まれる。また、P (person) には、生得的地位と獲得的・業績的地位、過去の体験、パーソナリティ特性などが含まれるとしている。われわ

れは、こうした点を考慮しながら、高齢者の自立生活を維持・促進させたり、遅らせたりする要因は何であるかを、縦断研究によって明らかにすることを目的とし、ADL、IADLと行動（B）、環境（E）及び個人（P）の関係について、大きな概念枠組みを設定することにした（図1）。

また、各概念の定義及び概念間の関係は以下の通りである（表1）。

1) 分析方法と対象

a) 調査方法

実証研究は、同一対象者に対して、2004年から2008年まで、4年間の追跡調査（5回調査）を行うことにしており、第1回調査は、2004年11月26日から2005年1月12日に訪問面接法により実施された。サンプリング及び対象者の特性等については、以下のとおりである。

本来、縦断研究の変化については、2回目以降のデータを分析した結果でないと、目的を達成することができない。

ここでは、初回の調査研究の一部を私の問題意識にそって、従属変数や独立変数を独自に選択しながら、単純なクロス集計によって分析し、 χ^2 等の統計的検定を行っていないことを、あらかじめ断っておきたい。また、ここで明らかにすることは、高齢者夫婦のみ世帯における家族役割とひとり暮らし高齢者及び夫婦世帯における高齢者の子ども・孫・親戚とのサポートネットワークについての実態を分析し、2回目以降の調査について若干の課題を述べることにするものである。

b) 対象

首都圏に在住し、自立している75歳から79歳の一人暮らし高齢者及び夫婦のみ世帯の在宅高齢者（300名）を対象とした。サンプリングについては、ランダム・サンプリングではなく、専門の調査機関に調査モニター

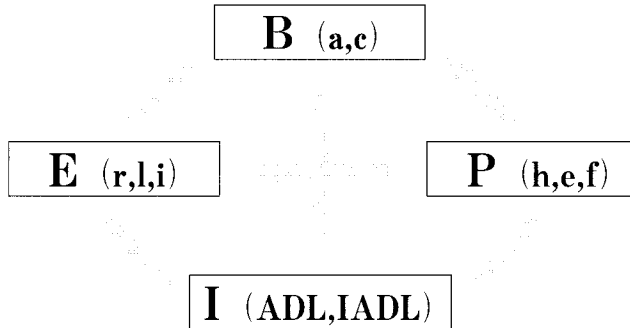


図1 調査設計と概念の関連図

表1 概念の定義

B=行動：Behavior

- a. 活動 (activity)：日常生活の中で顕在化し、反復継続される組織的動作
- c. 意識 (consciousness)：「活動」の駆動力となる心理、意思、意欲、欲望

P=個人要因：Person

- h. 健康 (health)：個人の客観的および主観的な肉体・精神の状況
- e. 経済 (economy)：個人の属する家計の資源調達手段の現状
- f. 家族 (family)：個人の属する最も基礎的な集団の様相

E=環境要因：Environment

- r. 住居 (residence)：個人の周囲にある最も第一次的な物理的空間
- l. 地域 (locality)：「住居」を囲繞する第二次的な物理的または社会的空間
- i. 情報 (information)：意味づけ、方向付けに関わる社会的空間（社会的資源の所在等）

I=活動指標：Index

ADL (基礎的動作能力)：入浴、更衣、排泄 (する・しない)、移乗、摂食

IADL (応用動作能力)：電話、外出、買物、調理、掃除、修理、洗濯、服薬、出納

【概念間の関係】

1. 大文字が上位概念、カッコ内の大文字及び小文字は中位概念。
2. 上位概念は、相互に説明変数たりうると仮定。調査結果によって矢印を否定していく。5年後否定されないう残った関係が実証されたと仮定。
3. 中位概念同士は、上位概念の範囲内で相互に規定し合うと仮定。

として登録されている高齢者のうち、調査の協力が得られた者の中から「自立した高齢者」をスクリーニングし、調査対象者とした（「自立」概念については後述する）。

対象者の特性をみると、世帯収入、持ち家率等は、首都圏に在住する同様の世帯の平均的水準からすると相対的にやや高い水準にある。したがって、サンプルは一人暮らし高齢者世帯及び夫婦のみの高齢者世帯を完全に代表しているとはいえない。しかし、限定された範囲ではあるが、後期高齢者の自立生活の維持及び衰退過程を追跡し、その実態の変化と要因については充分説明力をもっており、縦断研究としての意義は高いと考えられる。

c) 性・年齢、居住形態、地域

・年齢、性別

IADL 障害に関連する要因として多くの先行研究が認めているのは年齢と性別である。古谷野（1991）は年齢の影響を評価するために5歳増について算出したオッズ比は、男女ともにいずれの活動についても大きいこと、年齢によるオッズ比はいずれの活動についても男性より女性が大きいことを報告している。また神宮・江上ら（2003）は、80歳以後の落ち込みが顕著であり、IADL 障害は後期高齢者で顕著にみられること、さらに、医学的にも70歳代前半と後半では、身体状況に大きな差異があることを指摘している。

したがって、本調査は5年間の継続調査であることを考慮し、初回の調査開始時点では、75-79歳の後期高齢者を対象とし、IADLの変化を追うこととした。ただし、性・年齢階級別の人口構成に偏りはあるが、5年間の調査分析が可能になるよう、男女の割合が等しくなるようにサンプリングした。

・居住形態

居住形態は一人暮らしの高齢者または夫婦のみの高齢者世帯とした。そ

の理由は、「自立生活」を目的（従属）変数としているため、子どもとは独立した生活（世帯）を営んでいることが望ましいこと、さらには、今後、一人暮らしの高齢者や夫婦のみの高齢者が急速に増加することが予想されていることから、この層を対象とした調査を行う意義は大きいと考えられるからである。

・地域

東京を中心とした半径50キロメートル圏内の首都圏在住かつ元雇用者世帯を主要な対象とし、地域性、ライフスタイルの影響を排除するよう努めた。また、一人暮らしの高齢者世帯、夫婦のみの高齢者世帯が首都圏で多くみられることも考慮した。

d) 実査の方法

調査対象者には事前に調査依頼状を送付し、調査の趣旨、プライバシーに配慮すること等を伝えた。調査の実施は調査機関に委託し、訓練を受けた調査員が調査対象者の自宅を訪問し、調査票上に記された質問文を読み上げて回答を求めた。選択肢方式の設問の場合は、選択肢のみを記載したB5版の回答票を調査対象者に手渡して、その中から選択してもらった。

また、面接の開始時には、プライバシーに配慮すること、回答を拒否することが出来ることを改めて伝えた。調査対象者の家族、親族等の同席は拒まなかったが、代理回答は認めなかった。

e) 「自立」概念について

自立

手段的日常生活活動能力（instrumental activities of daily living : IADL）が全項目において自立している者を自立と判断した。

Lawton の IADL 尺度は買い物、食事の支度、洗濯、家事、電話の使用、金銭の管理、服薬、外出の8項目から構成されるが、伝統的な性別の役割

分業が交絡要因になるとの理由から、食事の支度、洗濯、家事の3項目は男性に適用しない場合もある。山田ら（1998）は IADL の能力と遂行の間に乖離があり、乖離の状況は性と活動項目によって異なることを明らかにしている。IADL の能力と遂行の乖離は 女性より男性で大きく、男性では特に家事関連の項目で大きい。

本調査は面接調査のため、IADL の遂行状況を観察により確認することはできない。よって男女ともに Lawton の自己評価版 IADL 尺度を翻訳して用いることとし、質問形式は、「○○できますか (Can you~?)」に統一した。さらに、食事と洗濯については付問として「自分でしていますか？」を質問し、「している」「していないがやればできる」から回答を選択してもらうことで能力と遂行の乖離について把握を試みた。

Lawton の自己評価 IADL 尺度のうち軽作業 (handyman work) と家事は、回答者によってイメージする内容にばらつきが大きいことから、調査項目から除外した。

よって、買い物、食事の支度、洗濯、電話の使用、金銭の管理、服薬、外出すべてが「できる」(食事と洗濯については「していないがやればできる」も含む) と回答した者を自立とし調査対象者とした。

2) 小論での課題と概念の整理及び分析の視点

ところで、人間関係は、大きくは家族内の人間関係と家族外の人間関係に分けることができるが、ことさら後期高齢期における夫婦のみの高齢者の生活はそのいずれにおいても、またひとり暮らし高齢者にとっても家族外との人間関係がきわめて重要になってくる。

ここでは、そうした視点から、高齢者夫婦のみ世帯とひとり暮らし高齢者世帯の高齢者を対象とし、以下のことを明らかにすることを目的とする。

- (1) 高齢者夫婦世帯における高齢者がどのような家族役割を担い、また、
- (2) 高齢者夫婦のみの世帯及びひとり暮らし世帯における高齢者が子どもや孫及び親戚とどのような人間関係を取り結び、その支援関係はどのような関係にあるのかなど、高齢者のソーシャルネットワークとソーシャルサポートについて検討する。

上記の目的を明らかにするため、各々に関連する概念を整理する。

まず、日常語の「役割」とは、広く現実の社会生活において、人々をその仕事や資格に従って部類分けをし、そのような区分された人々によって、遂行されている、あるいは遂行すべき「働き」や「役目」をさしている。また、それは、他者の行為と関わり合いをもっている一連の行為からなりたっており、社会の構造的次元と個人の意識や行動の次元とを媒介する概念として重視されてきている。最も一般的な意味での役割は、何らかの社会的位置を占めている人々の間で、それらの位置との関連において生起する、あるいは見出すことのできる一連の行為様式に関わる概念であるといわれる（斎藤吉雄、1993）。

ここでは、家族の内部構造を捉える一般的な枠組みのひとつとして、「役割構造」をとりあげる。パーソンズによれば、家族外部への適応と課題遂行に関わる感情中立的な手段的役割（instrumental role）と、集団の維持と成員の統合によって関わる表出的役割（expressive role）を区別して、前者は夫（父）によって、後者は主に妻（母）によって担われる傾向があるといわれる（Parsons, t. & Bales, RF., 1955）。また、森岡清美は、家族のもつ集団性と関係性に着目し、それぞれ集団的地位に対応する集団的役割、関係的地位に対応する関係的役割が重層的に家族内の役割構造を形成しているという。集団的役割は、家族という集団を維持するために欠くことのできない活動を分担するものである。それらは、(1) 家事とよばれる消費生活のための役割、(2) 消費生活の前提としての所得を得る役割、(3) 老幼弱者がいれば彼らを介護養育する役割、(4) 家族内の心理

的な緊張関係を緩和して情緒的統合を支える役割、(5) 家族を親族・近隣や地域の諸機関に連結する、渉外的代表的役割、(6) 先祖を祭る役割などがあげられる(森岡、1998)。これらのうち、(1)と(2)と(4)が基礎的であるが、高齢化社会をむかえ、高齢者の家族介護が「介護保険制度」として社会化されたとはいえ、高齢者介護に関わる家族のもつ意味は依然として重要である。

一方、個人が取り結ぶ人間関係は、家族関係、親戚関係、近隣関係、友人関係などの多様な社会関係を形成し、そのなかで人々は社会生活を営んでいる。こうした個人が取り結ぶ人間関係の態様(社会関係)は、構造的側面と機能的側面とに分けることができるが、分析的には、ソーシャルネットワーク(social network)とソーシャルサポート(social support)という概念で捉えられることが多い。

ソーシャルネットワークは、前者の構造的側面に着目し、他者の数、規模、接触頻度などが指標として用いられている(野口、1991)。今回は、子どもとの交流頻度については、a)子どもが高齢者(自分)の家に訪ねてきたり、子どもから誘われて一緒に出かけること、b)高齢者の方から子どもの家をたずねたり、子どもを誘って一緒に出かけること、c)子どもと電話で話したり、メールでやりとりすることの3つの質問を設定し、第1子とのかかわり及び第1子から第6子までの合計(子ども全体)のかかわりの双方から把握することにした。すなわち、第1子(長子)及び子ども全体との交流頻度(例えば、子どもへの訪問と子どもからの訪問)を明らかにすることによって、高齢者個人と子ども個人及び高齢者個人と子ども全体とのかかわりがどのような関係にあるのかを量的に把握することが可能になると考えられる。

また、ソーシャルサポートは、他者とのかかわりの中でどのような関係をもっているのかという社会関係の機能的側面に着目し、実態的には、情緒的なサポートと手段的なサポートに分けて把握されていることが多い

(西村、2003)。また、サポートの授受は、享受 (receiving support) ばかりではなく、提供 (providing support) をも含む互酬性 (reciprocity) の関係にあり、ポジティブ (positive) な関係とネガティブ (negative) な関係の双方を含んでいる (奥山、1994)。今回は、情緒的なサポートの内容として、a) 「心配事や悩み事をきいてくれる人」(「心配事や悩み事をきいてあげる人」、手段的なサポートの内容として、b) 「病気で数日寝込んだ時に看病や世話をしてくれる人」(「病気で数日寝込んだ時に看病や世話をしてあげる人」、c) 「お使いや留守番などのちょっとした用事を頼める人」(「お使いや留守番などのちょっとした用事を頼まれる人」という質問を設定し、享受と提供の双方向から検討することにした。

また、ソーシャルネットワークの内容については、現に行なっている実態面 (経験) で把握するという方法を取り、ソーシャルサポートの授受の内容については、実態面 (経験) ではなく、可能性 (仮定) として把握する方法を採用した。そうした方法をとった理由は、ネットワークについては、日頃の交流頻度を量的に把握することができるが、サポートについては、頻度として、日常的にはそれほど多くなく、量的な把握が困難であるためである。

3) 調査結果—高齢者夫婦の家族役割

家族内における高齢者夫婦の家事役割について、主に「自分」がしているのか、それとも「配偶者」がしているのか、を(1)生活費の管理～(9)資産の管理の9項目について検討してみた(表2)。

対象者が「男性」(夫の立場)のばあい、「自分」という回答が5割を超えている家事役割は「書類作成・登録など」(78.2%)のみである。また、「配偶者」より「自分」という回答が高い項目は、「資産の運用」(41.7%)という役割のみであり、しかもその比率は「両方」で行なっているという

表2 高齢者夫婦のみの世帯における家族役割

		自 分	配偶者	両 方	合 計
男 性	(1) 生活費の管理	24.3% (27)	62.2% (69)	13.5% (15)	100.0% (111)
	(2) 旅行・外出の決定	36.4% (39)	17.8% (19)	45.8% (49)	100.0% (107)
	(3) 書類作成・登録など	78.2% (86)	9.1% (10)	12.7% (14)	100.0% (110)
	(4) 掃除	12.8% (14)	62.4% (68)	24.8% (27)	100.0% (109)
	(5) 洗濯	8.2% (9)	76.4% (84)	15.5% (17)	100.0% (110)
	(6) 炊事	6.3% (7)	81.1% (90)	12.6% (14)	100.0% (111)
	(7) 親戚の冠婚葬祭	18.0% (20)	6.3% (7)	75.7% (84)	100.0% (111)
	(8) 子どもの相談にのる	9.6% (9)	20.2% (19)	70.2% (66)	100.0% (94)
	(9) 資産の運用	41.7% (45)	17.6% (19)	40.7% (44)	100.0% (108)
女 性	(1) 生活費の管理	72.3% (47)	16.9% (11)	10.8% (7)	100.0% (65)
	(2) 旅行・外出の決定	64.5% (40)	16.1% (10)	19.4% (12)	100.0% (62)
	(3) 書類作成・登録など	41.3% (26)	50.8% (32)	4.9% (5)	100.0% (63)
	(4) 掃除	81.5% (53)	7.7% (5)	10.8% (7)	100.0% (65)
	(5) 洗濯	92.3% (60)	4.6% (3)	3.1% (2)	100.0% (65)
	(6) 炊事	89.2% (58)	4.6% (3)	6.2% (4)	100.0% (65)
	(7) 親戚の冠婚葬祭	26.2% (17)	3.1% (2)	70.8% (46)	100.0% (65)
	(8) 子どもの相談にのる	32.7% (18)	7.3% (4)	60.0% (33)	100.0% (55)
	(9) 資産の運用	43.1% (28)	35.4% (23)	21.5% (14)	100.0% (65)

注：一人暮らし及び「その他」と「無回答」を除く

比率の40.7%とほとんど拮抗している。また、「両方」でおこなっているという家事役割で過半数を大きく超えている項目は、「親せきの冠婚葬祭」(75.7%)と「子どもの相談にのる」(70.2%)の2項目のみである。したがって、その他の「炊事」「洗濯」「掃除」「生活費の管理」などの家事役割は、圧倒的に「配偶者」(妻)が行なっていると認識しており、「自分」であると認識している男性は、それぞれ6.3%、8.2%、12.8%、24.3%と極めて少ない。

一方、女性の場合、「炊事」「洗濯」「掃除」「生活費の管理」などの中心的な家事役割は、『自分』が7割から9割に達し、そのほとんどが「自分」が行なっていると回答している。「配偶者」(夫)がおこなっているという家事役割で過半数を超えているのは、「書類作成・登録など」(50.8%)のみである。したがって、多くの女性は、「炊事」「洗濯」「掃除」「生

活費の管理」などの中心的な家事役割から「旅行・外出の決定」「資産の運用」にいたるまで、主に「自分」が行なっていると認識している。

全体としては、「妻」の立場である女性の方が、男性より圧倒的に家事役割を行なっていることが伺われ、「男性」（夫の立場）と「女性」（妻の立場）の間に大きな乖離がみられる。つまり、同じ家事役割における各項目の回答は、男性が「自分」で行なっているという割合と女性の立場からみた「配偶者」が行なっているという割合を比較すると、女性からみた配偶者の比率が著しく低いという特徴がみられる。これらの傾向は、実態に男女差を反映していると同時に、男女の認識の差が依然として大きいことを示唆している。

(1) 子どもとのソーシャルサポートネットワーク—子どもの基本的属性

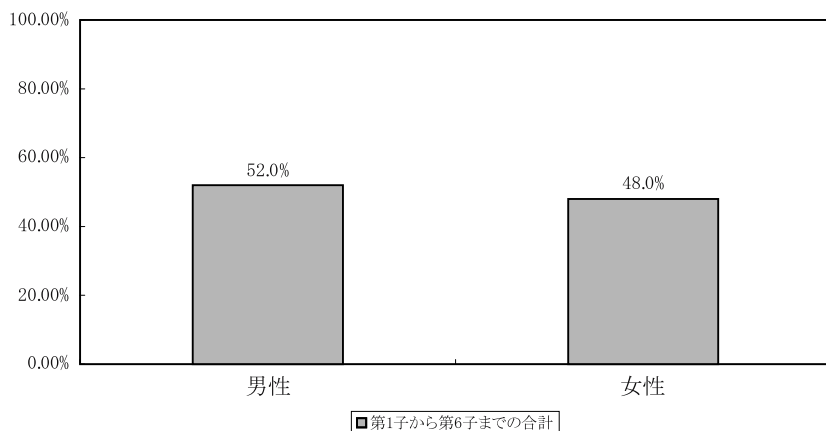
対象者 300 人のなかで、子どもがいない人は 38 人、子どものいる人が 262 人である。

第 1 子だけについてみると、262 人中、性別は男 50.4%（132 人）、女 49.6%（130 人）で半々である。第 1 子の年齢分布は最も年齢の低い 31 歳から最も高い年齢の 60 歳まで分布する。最も多い年齢層は 50 歳である。婚姻状態は、既婚が 93.9%、未婚が 6.1% であった。居住地は、「同一敷地内」7.6%、「近く（徒歩 5 分程度）」8.4%、「片道 1 時間未満の場所」42.7%、「片道 1 時間以上の場所」41.2% で、全体としては 1 時間以内と 1 時間以上のところに住んでいる子ども（第 1 子）がほとんどを占めていた。

表 3 第 1 子から第 6 子までの男女比（合計）

	第 1 子	第 2 子	第 3 子	第 4 子	第 5 子	第 6 子	合計
男性	50.4% (132)	52.2% (108)	57.1% (36)	56.3% (9)	50.0% (2)	50.0% (1)	52.0% (288)
女性	49.6% (130)	47.8% (99)	42.9% (27)	43.7% (7)	50.0% (2)	50.0% (1)	48.0% (266)
合計	100.0% (262)	100.0% (207)	100.0% (63)	100.0% (16)	100.0% (4)	100.0% (2)	100.0% (554)

図2 第1子から第6子までの男女比（合計）



第1子から第6子までの合計でみると、子ども数は述べ人数551人、また、第1子から第3子まではそれぞれ262人、207人、63人と多いが、第4子から極端に少なくなり、第4子は16人、第5子は4人、第6子は2人、性別は男52.0%、女48.0%、となっている（表3、図2）。

子どもの年齢分布は「46歳から50歳まで」（38.3%）が最も多く、「41歳から45歳」「51歳から55歳まで」が各々22.0%である（表4、図3）。婚姻状況をみると、全体では既婚者92.4%、未婚者7.6%である（表5、

表4 第1子から第6子までの年齢（合計）

	第1子	第2子	第3子	第4子	第5子	第6子	合計
31歳から35歳まで	0.8%(2)	2.9%(6)	4.8%(3)	—	25.0%(1)	50.0%(1)	2.4%(13)
36歳から40歳まで	6.9%(18)	12.6%(26)	11.3%(7)	25.0%(4)	—	—	10.0%(55)
41歳から45歳まで	16.9%(44)	28.6%(59)	22.6%(14)	12.5%(2)	50.0%(2)	—	22.0%(121)
46歳から50歳まで	37.2%(97)	35.9%(74)	48.4%(30)	50.0%(8)	25.0%(1)	50.0%(1)	38.3%(211)
51歳から55歳まで	28.7%(75)	17.5%(36)	12.9%(8)	12.5%(2)	—	—	22.0%(121)
56歳から60歳まで	9.6%(25)	2.4%(5)	—	—	—	—	5.4%(30)
合計	100.0%(261)	100.0%(206)	100.0%(62)	100.0%(16)	100.0%(4)	100.0%(2)	100.0%(551)

（注） 不明をのぞく

図 3 第 1 子から第 6 子までの年齢 (合計)

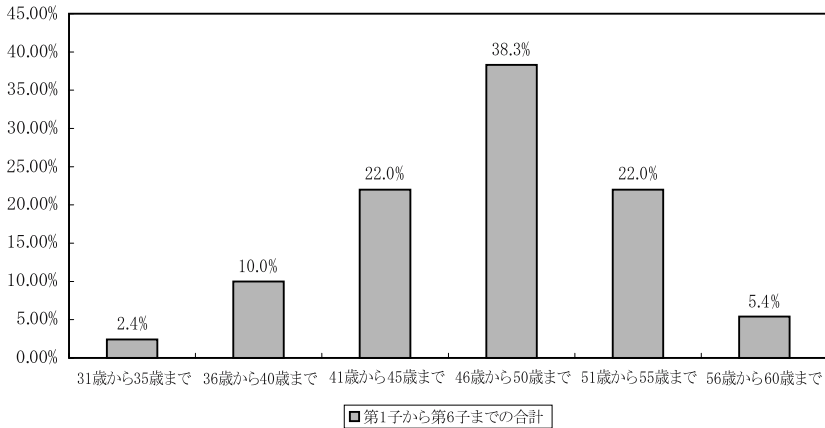


表 5 第 1 子から第 6 子までの結婚の有無 (合計)

	第 1 子	第 2 子	第 3 子	第 4 子	第 5 子	第 6 子	合計
既婚	93.9%(246)	92.8%(192)	87.3%(55)	87.5%(14)	75.0%(3)	100.0%(2)	92.4%(512)
未婚	6.1%(16)	7.2%(15)	12.7%(8)	12.5%(2)	25.0%(1)	—	7.6%(42)
合計	100.0%(262)	100.0%(207)	100.0%(63)	100.0%(16)	100.0%(4)	100.0%(2)	100.0%(554)

図 4 第 1 子から第 6 子までの結婚の有無 (合計)

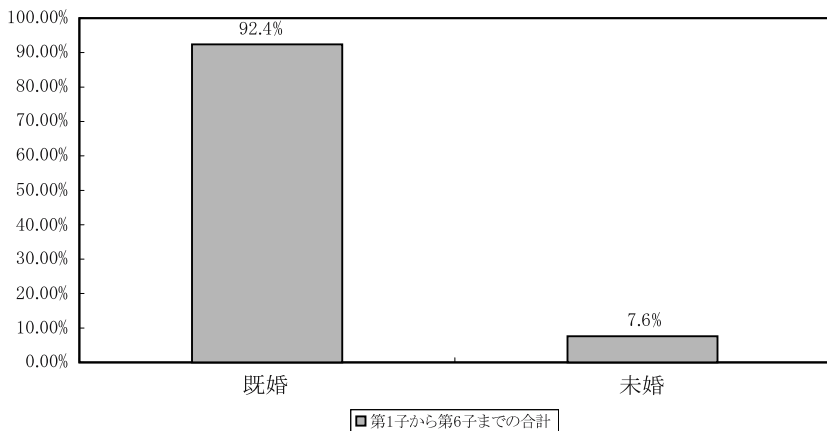


表6 第1子から第6子までの居住地（合計）

	第1子	第2子	第3子	第4子	第5子	第6子	合計
同一敷地内	7.6%(20)	6.3%(13)	3.2%(2)	—	—	—	6.4%(35)
近く(徒歩5分程度)	8.4%(22)	9.8%(20)	7.9%(5)	12.5%(2)	—	—	8.9%(49)
1時間未満の場所	42.8%(112)	42.4%(87)	36.5%(23)	43.75%(7)	50.0%(2)	100.0%(1)	42.1%(232)
1時間以上の場所	41.2%(108)	41.5%(85)	52.4%(33)	43.75%(7)	50.0%(2)	—	42.6%(235)
合計	100.0%(262)	100.0%(205)	100.0%(63)	100.0%(16)	100.0%(4)	100.0%(1)	100.0%(551)

図5 第1子から第6子までの男女比（合計）

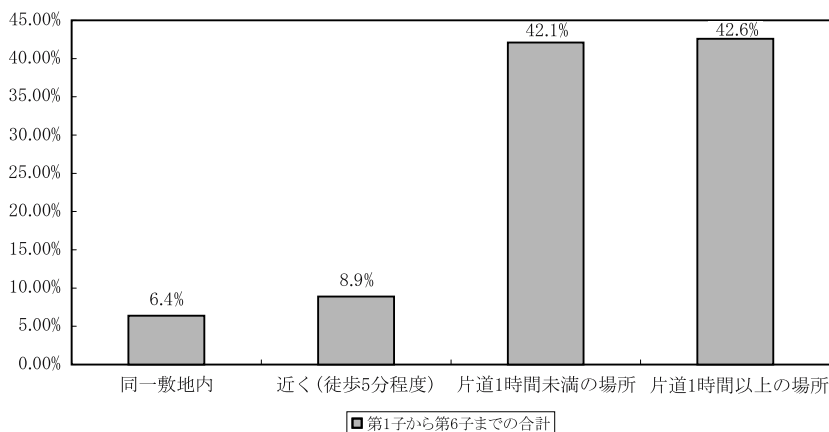


図4)。居住地をみると、合計では、「片道1時間未満の場所」42.1%、「片道1時間以上の場所」42.6%と第1子の状況とほとんど同様である。「同一敷地内」「近く(徒歩5分程度)」は各々6.4%、8.9%、合計しても15.3%と少ない(表6、図5)。

2) 子どもとのソーシャルネットワーク

a) 子どもが高齢者(自分)の家に訪ねてきたり、子どもから誘われて一緒に出かけること

a-1) 第1子の場合

では、子どもが高齢者(対象者)の家へたずねてきたり、子どもから誘われて一緒に出かけることがどれくらいあるかを検討してみよう。

選択肢は、「ほとんど毎日」「週に1回くらい」「1カ月に2、3回くらい」「1カ月に1回くらい」「年に数回」「数年に1度くらい」「ほとんどない」である。図6及び図7は、第1子居住地別・対象者の性別からみた子どもが高齢者（対象者）の家へたずねてきたり、子どもから誘われて一緒に出かける頻度をみたものである。「同一敷地内」「近く（徒歩5分程度）」では、男性、女性とも「ほとんど毎日」及び「週に1回くらい」の頻度で子ども（第1子）がたずねてきたり、子どもと外出することが多い。特に、「同一敷地内」では、対象者が男性より女性に「ほとんど毎日」子どもがたずねてくるケースが多い。「片道1時間未満の場所」では、女性の方に「週に1回くらい」が多いが、総体としては、男性、女性とも「週に1回くらい」「1カ月に2、3回くらい」「1カ月に1回くらい」「年に数回」に満遍なく分散している傾向がみられる。「片道1時間以上の場所」になると、子どものたずねてくる回数は減って、男女とも「年に数回」が過半数を超える状態になるが、「週に1回くらい」「1カ月に2、3回くらい」「1カ月に1回くらい」を合わせると、男子で2割ほど、女子で36%ほどになり、女子ほど子どもが訪問してくるケースが多い。

図6 子どもが家に訪問したり子から誘われての外出—第1子居住地別対象者性別（男性）—

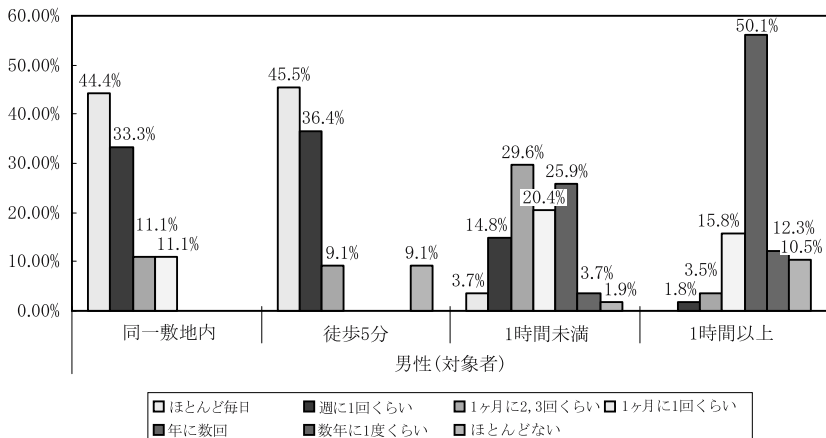
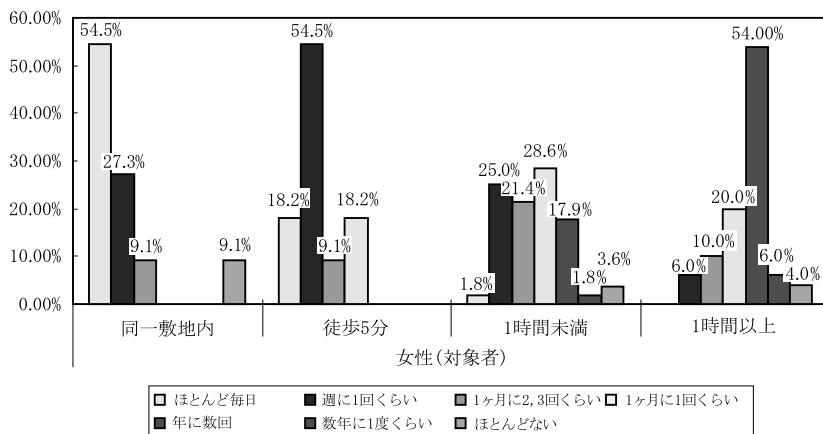


図7 子どもが家に訪問したり子から誘われての外出—第1子居住地別対象者性別（女性）—



a-2) 第1子から第6子までの子ども全員の場合（合計）

図8及び図9は、子どもが高齢者（自分）の家に訪ねてきたり、子どもから誘われて一緒に出かけることが対象者の性別及び居住形態別（ひとり暮らし、夫婦ふたり）別にどのような状態になっているのかを検討したものである。パーセントは図8及び図9毎に男性・女性それぞれ子どもの述べ人数を実数で除したものである。ちなみにひとり暮らしの男性対象者30人に対して子供の延べ人数は61人、同じく女性対象者70人に対して子どもの延べ人数は149人である。また、夫婦ふたりの男性対象者101人に対して子どもの延べ人数は211人、女性対象者58人に対して子どもの延べ人数は126人である。したがって、割合は合計すると100%を超える。それらの図によれば、ひとり暮らしの男性、女性及び夫婦ふたりの男性、女性とも「子どもが高齢者（自分）の家に訪ねてきたり、子どもから誘われて一緒に出かける」頻度は、「年に数回」が最も多い。また、居住形態による差をみると、「夫婦ふたり」よりは「ひとり暮らし」の高齢者（対象者の男女とも）に、「ほとんど毎日」か「週に1回くらい」が多く、それだけ子どもが「ひとり暮らし」の親のところへ訪問してきていることを

図8 子どもが家に訪問したり子から誘われての外出（ひとり暮らし、第1子～第6子の合計）
—対象者の性別（男女）—

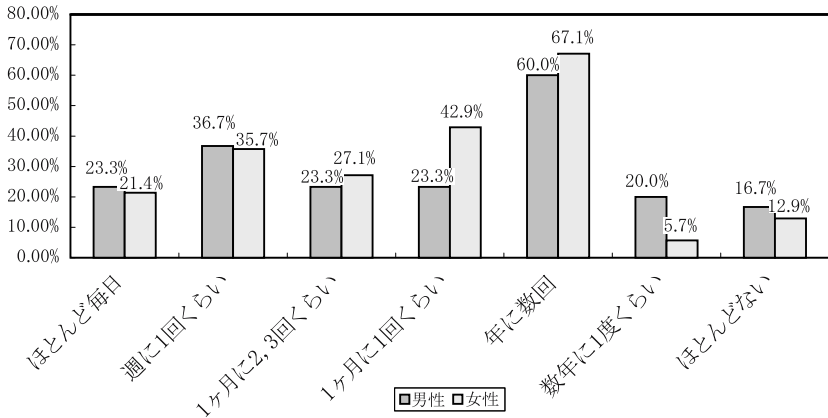
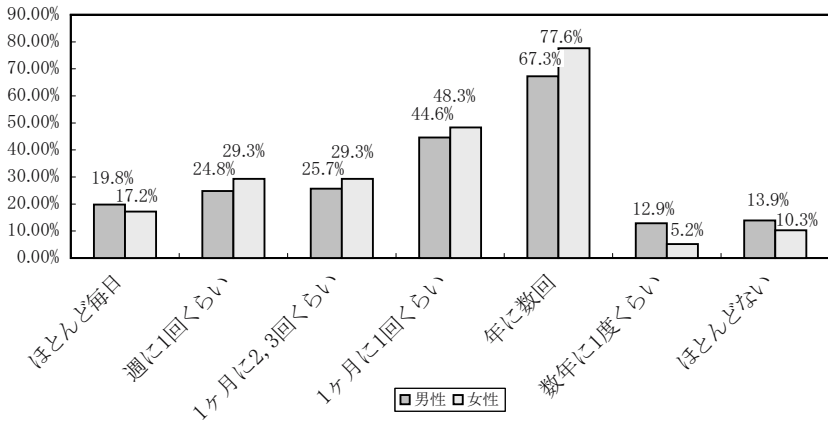


図9 子どもが家に訪問したり子から誘われての外出（夫婦二人暮らし、第1子～第6子の合計）
—対象者の性別（男女）—



意味している。また、一方では、「ひとり暮らし」及び「夫婦ふたり」の
 ばあいでも子どもが訪問してくる機会が「ほとんどない」割合も1割を超
 えており（男性にやや高い）、接触の頻度が少ないことを示唆している。

b) 高齢者の方から子どもの家をたずねたり、子どもを誘って一緒に出かけること

b-1) 第1子の場合

では、対象者の高齢者が子どもの家をたずねたり、子どもを誘って一緒に出かける頻度について、第1子居住地別・対象者の性別から検討してみよう(図10及び図11)。それによれば、親側の立場である「自分」から

図10 子どもが家への訪問や子を誘っての外出—第1子居住地別・対象者性別(男性)—

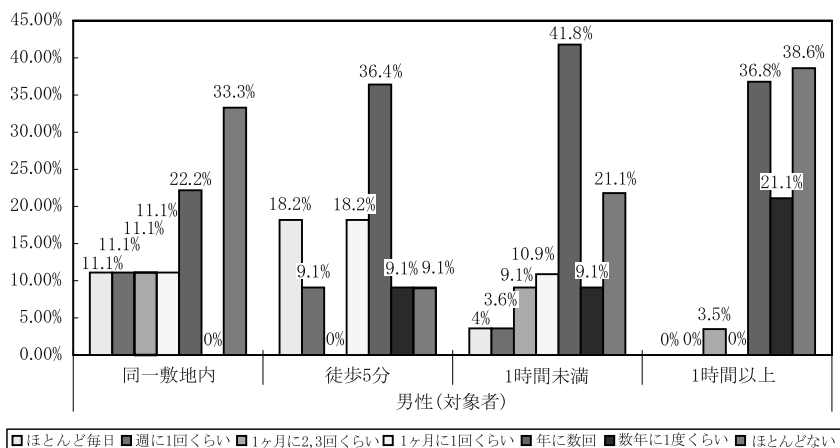
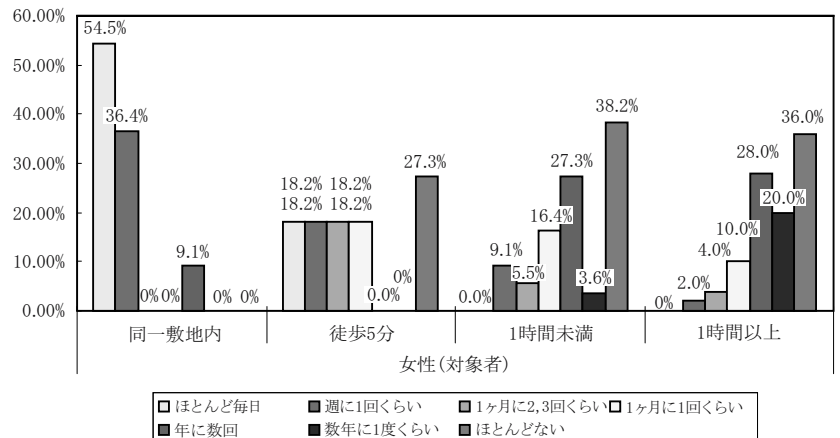


図11 子どもが家への訪問や子を誘っての外出—第1子居住地別・対象者性別(女性)—



子どもの家への訪問等については、「同一敷地内」では、女性が「ほとんど毎日」と「週に1回くらい」を合計すると8割を超え、会っている頻度がきわめて高い。しかし、全体としては自分たちからたずねる回数は低く、特に男子では「年に数回」と「ほとんどない」が多く、女性は「ほとんどない」が多い。その意味では、高齢者側からの訪問頻度は距離によって明らかに差がみられると言っていいであろう。

b-2) 第1子から第6子までの子ども全員の場合（合計）

図12及び図13は、対象者の性別及び居住形態別（ひとり暮らし、夫婦ふたり）別に高齢者の方から子どもの家をたずねたり、子どもを誘って一緒に出かけることがどのような状態になっているのかを検討したものである。「子どもが自分の家に訪問したり～」と同様、「年に数回」や「ほとんどない」が最も多い。特徴的なことは、前述した「子どもが訪問してくる」回数（図8、図9）よりも高齢者が「子どもの家へ訪問する～」回数の方がはるかに少ないということである。この傾向は、「ひとり暮らし」よりは「夫婦ふたり」の男女においてより顕著である。

図12 子どもの家への訪問や子を誘っての外出（ひとり暮らし、第1子～第6子の合計）
—対象者の性別（男女）—

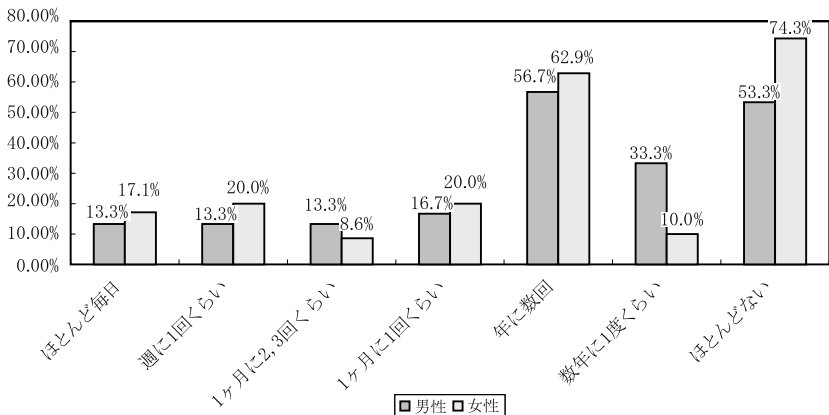
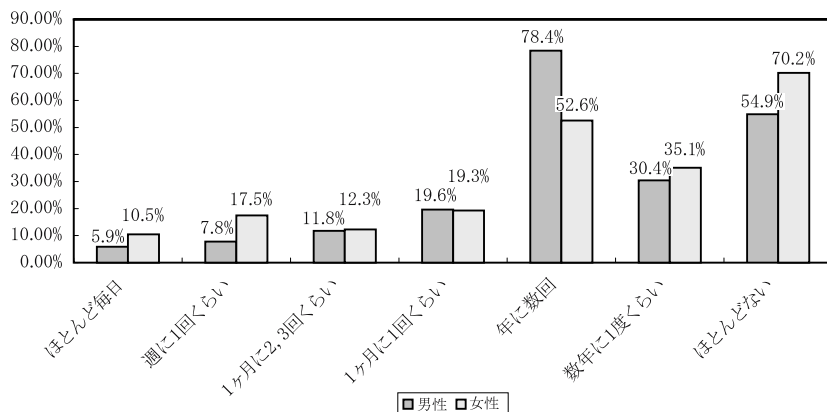


図13 子どもが家への訪問や子を誘っての外出(夫婦ふたり, 第1子～第6子の合計)
—対象者の性別(男女)—



c) 子どもと電話で話したり、メールでやりとりすること

c1) 第1子の場合

子どもをたずねたり、あるいは子どもがたずねてきたりという直接接触という方法ではなく「電話で話したり、メールをやりとりする」という関わりはどのような状態か。同様に、第1子居住地別・対象者の性別から検討してみよう(図14及び図15)。図にみられるように、総じていえば、男性より女性の方が子どもの居住地に関わらず、電話での話やメールによるやりとりなどは、その頻度が高い。また、子どもとの間を行ったり来たりするという交流頻度は、距離によって規定されていたが、電話での話やメールによるやりとりなどの手段は「近く(徒歩5分程度)」「片道1時間未満の場所」「片道1時間以上の場所」の居住地に関わらず、利用している対象者が多い。特に対象者である親側の高齢者と子どもの距離が「1時間以上」のばあいには、接触頻度が「年に数回」「数年に1度くらい」「ほとんどない」が多いことを考慮すると、こうした電話のやりとりによって直接に接触できない部分を代替しているとも考えられる。その意味では、全体として、高齢者側が孤立しているというよりは、自立しながら電話な

図14 子どもの電話やメールのやりとり—第1子居住地別・対象者性別（男性）—

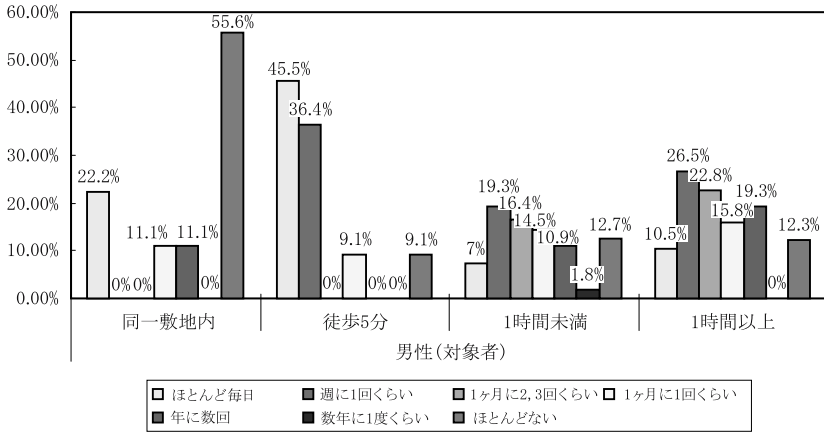
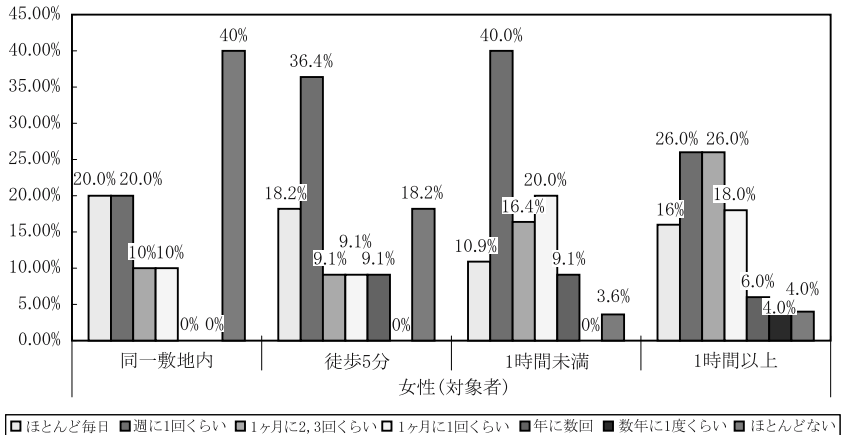


図15 子どもの電話やメールのやりとり—第1子居住地別・対象者性別（男性）—



どのコミュニケーション手段によって間接的に接触しており、補完的な機能を果しているといえよう。

c2) 第1子から第6子までの子ども全員の場合（合計）

図16及び図17は、子どもと電話で話したり、メールでのやりとりが対象者の性別及び居住形態別（ひとり暮らし、夫婦ふたり）別にみるとどのよ

図 16 子どもとの電話やメールのやりとり（ひとり暮らし、第1子～第6子の合計）
—対象者の性別（男女）—

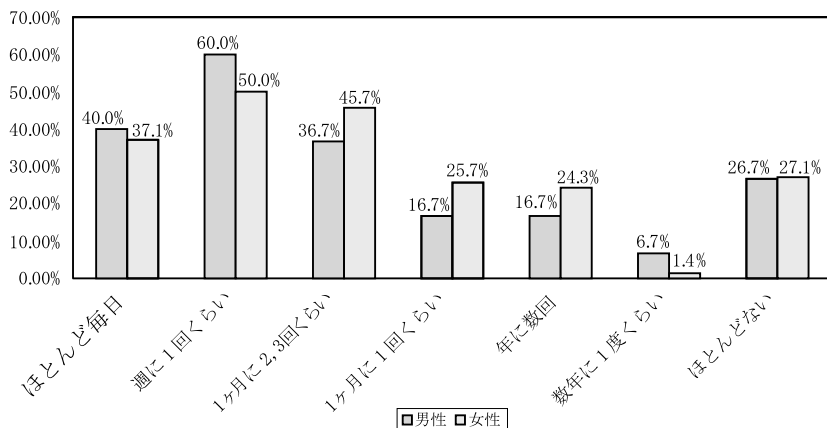
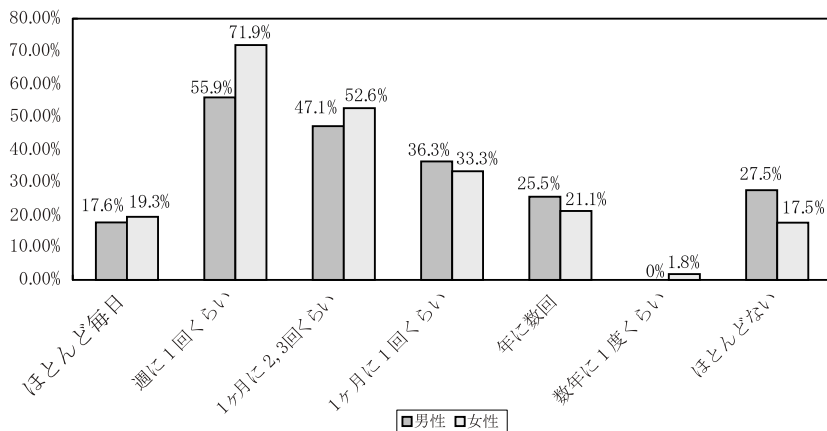


図 17 子どもとの電話やメールのやりとり（夫婦二人、第1子～第6子の合計）
—対象者の性別（男女）—



うな状態になっているのかを検討したものである。ここでの特徴は、子どもとの往來の頻度と異なって、ひとり暮らし及び夫婦ふたりの男女とも、「週に1回」を筆頭に、「1カ月に2、3回」までを含めると、子どもとの電話やメールでのやりとりが比較的多いということである。また、「ひとり暮らし」では「ほとんど毎日」、「夫婦ふたり」では「1カ月に1回くら

い」がそれぞれ相対的に多くなっており、その世帯の特徴をうかがい知ることができる。

4) 孫とのネットワーク

孫のいない人は約2割、孫のいる人のなかで、孫の人数が2人という対

図18 孫との交流頻度—対象者の性別・居住地別—

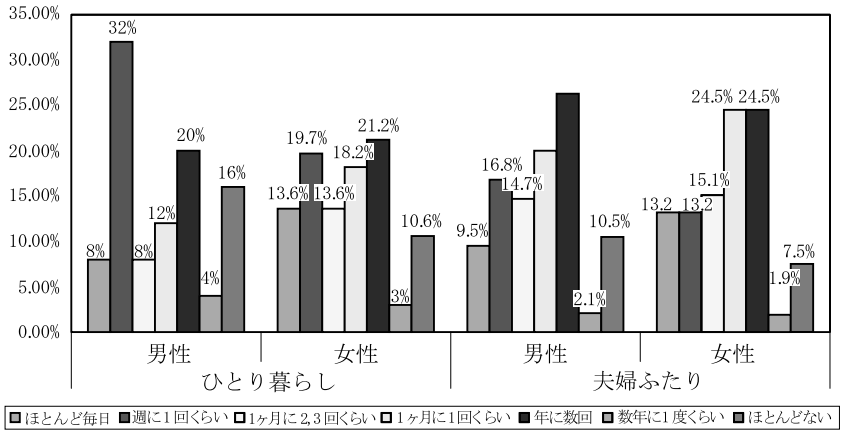
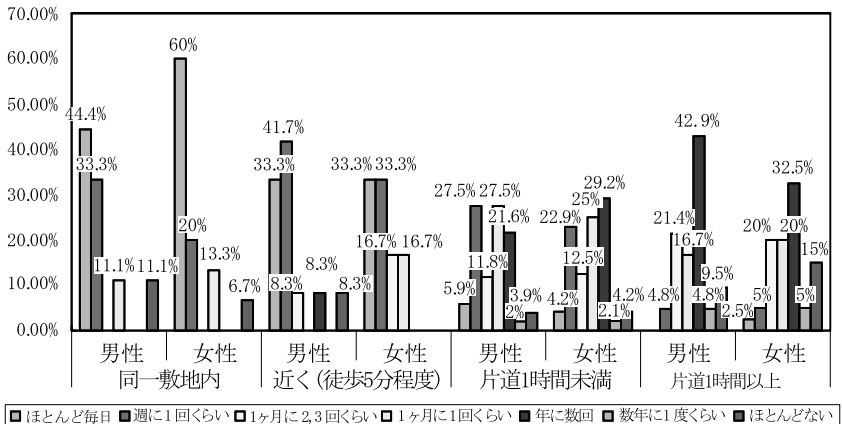


図19 孫との交流頻度—対象者の性別・居住地別—



象者が最も多く、約2割、3人から4人までがそれぞれ15%前後存在する。孫の人数の範囲は、1人から最も多い人で20人まで分布する。平均すると3.03人である。

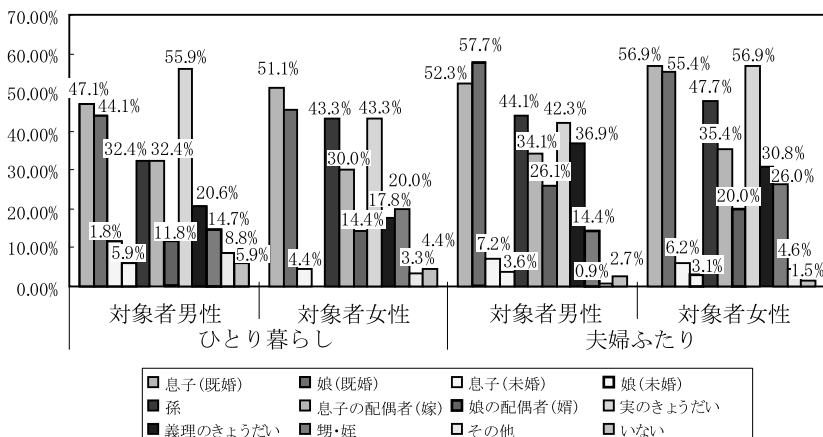
図18は、性別・居住形態別孫との交流頻度をみたものである。「ひとり暮らし」及び「夫婦ふたり」の男性、女性とも「ほとんど毎日」から「ほとんどない」まで多様性がある。また、図19は、対象者の性別・居住別に孫との交流頻度をみたものである。「同一敷地内」及び「近く（徒歩5分程度）」と距離が近いほど、孫との接触頻度は多い傾向がみられる。また、「片道1時間未満」や「片道1時間以上」の距離が離れていても、「週に1回くらい」から「年に数回」までばらつきはあるが、それなりに接触がみられるようである。

5) 親族ネットワーク

a) 配偶者以外で親しくしている家族や親戚

配偶者以外で親しくしている家族や親戚（MA）は、高い方から「息子

図20 配偶者以外で親しくしている家族や親戚（MA）—対象者の性別・居住形態別—



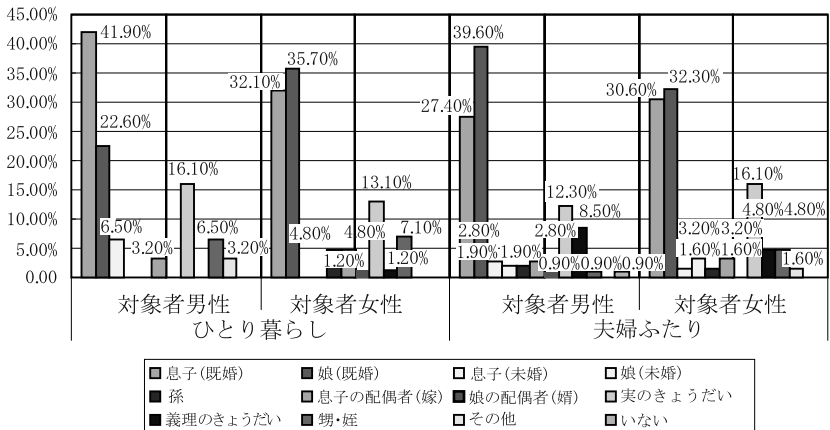
「既婚」52.3%、「娘（既婚）」52.0%、「実のきょうだい」47.3%、「孫」43.3%、「息子の配偶者（嫁）」33.0%、「義理のきょうだい」28.0%、「娘の配偶者（婿）」19.7%、「甥・姪」18.7%の順となっている。こうした結果は、当然ながら実の子どもである息子や娘、きょうだい及び孫などは血縁であることから親しみやすさが増すと考えられる。

では、対象者の性別・居住形態別にみるとどうであろうか（図20）。ひとり暮らし、夫婦ふたりの男性、女性とも「息子（既婚）」、「娘（既婚）」、「実のきょうだい」、「孫」などを親しくしている家族・親戚と認識している。また、ひとり暮らしの男性、夫婦ふたりの女性では、「実のきょうだい」をあげる人が最も高い。

b) 配偶者以外で最も親しくしている家族や親戚

全体として、最も親しくしている家族や親戚（SA）は、高い方から「娘（既婚）」33.3%、「息子（既婚）」29.3%、「実のきょうだい」13.0%の順である。これを、対象者の性別・居住形態別にみると、ひとり暮らしの男性では、「息子（既婚）」、「娘（既婚）」の順、夫婦ふたりの男性では、

図21 配偶者以外で最も親しくしている家族や親戚（MA）—対象者の性別・居住形態別—



「娘（既婚）」、「息子（既婚）」、またひとり暮らしの女性及び夫婦ふたりの女性では、「娘（既婚）」、「息子（既婚）」がほぼ同率で高くなっている（図21）。こうした結果は、ひとり暮らし、夫婦ふたりにかかわらず、配偶者以外で最も親しくしている家族や親戚として考慮されているのは、実の息子（既婚）や娘（既婚）ということである。

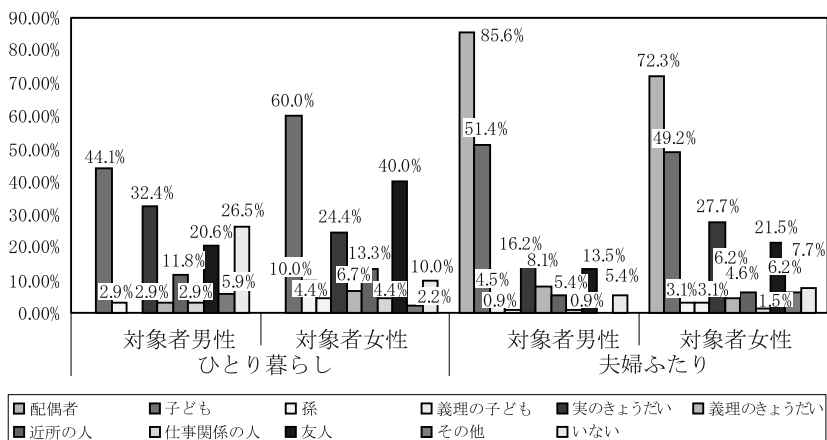
6) ソーシャルサポート（享受：receiving support）

a) 心配事や悩み事をきいてくれる人

日頃の人間関係について、心配事や悩み事をきいてくれる人がいるかどうかを、対象者の性別・居住形態別に検討したのが、図22である。夫婦ふたりが健在である場合には、男性、女性とも「配偶者」「子ども」の順にその割合が高い。特に男性のばあいには、「配偶者」（妻）に頼っている傾向が極めて高く、女性との間に乖離がみられる。

ひとり暮らしの場合には、男性も女性も「子ども」をあげる人が多く、特に女性にその割合が高い。また、ひとり暮らしの場合でも夫婦ふたりが

図22 心配事や悩み事をきいてくれる人（MA）—対象者の性別・居住形態別—



健在である場合でも「実のきょうだい」や「友人」をあげる人が多く、特にひとり暮らしの女性では、「友人」をあげる人が多い。一方、ひとり暮らしの男性では、心配事や悩み事をきいてくれる人がひとりもないという比率が26.50%も存在しており、孤立していると思われる傾向がみられる。

b) 病気で数日寝込んだ時に看病や世話をしてくれる人

もし、病気で数日寝込んだ時に看病や世話をしてくれる人がいるかどうか、対象者の性別・居住形態別に検討したのが、図23である。それによれば、心配事や悩み事と同様に、夫婦ふたりが健在である場合には、男性、女性とも「配偶者」が圧倒的に高く、次いで「子ども」の順となっている。特に男性のばあいには、「配偶者」(妻)に頼る割合が極めて高く、「心配事や悩み事」及び「ちょっとした用事を頼める人」を含めた3つのサポートのなかでは最も高い。また、それ以外の人を頼りにしている比率は、男性、女性とも10%以下である。看病や世話は、それだけ、他人が介入できるものではないということの反映であろうか。一方、ひとり暮らしの男

図23 病気で寝込んだ時の看病や世話をしてくれる人 (MA) —対象者の性別・居住形態別—

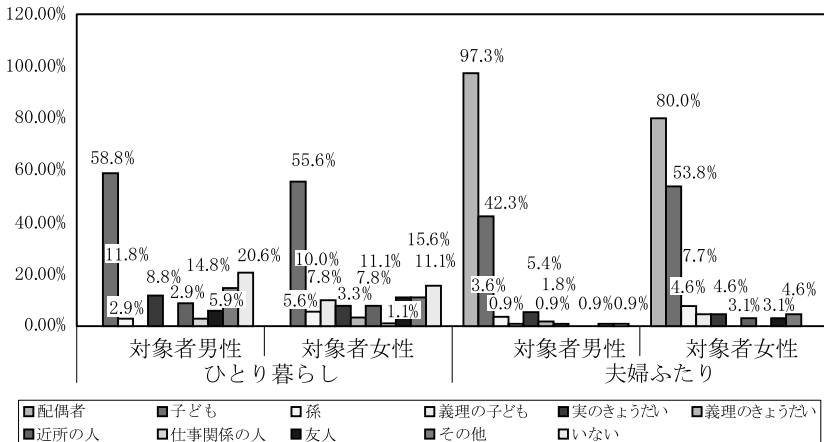
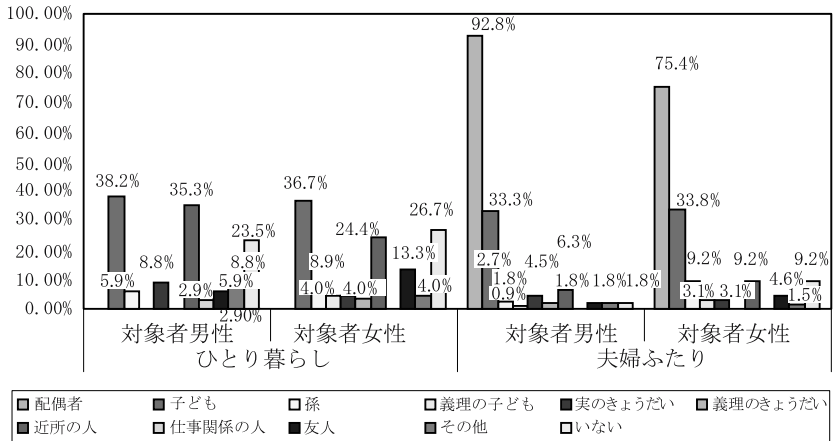


図 24 ちょっとした用事を頼める人 (MA) —対象者の性別・居住形態別—

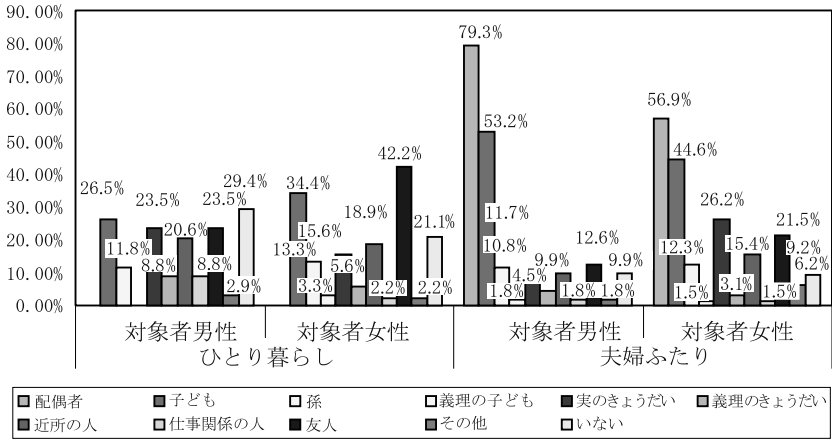


性、女性とも「子ども」をあげる人が過半数を超え、第一位を占めているが、夫婦ふたりの場合と同様、それ以外の人はそれぞれ1割前後でそれほど多くはない。むしろ、男性、女性とも世話をしてくれる人が誰も「いない」という比率がそれぞれ15%から21%ほど存在しており、緊急時の対応が課題となっている。

c) お使いや留守番などのちょっとした用事を頼める人

図 24 は、お使いや留守番などのちょっとした用事を頼める人について、対象者の性別・居住形態別に検討したものである。夫婦ふたりが健在である場合には、「病気で数日寝込んだ時」と同様、男性、女性とも「配偶者」が圧倒的に高く、次いで「子ども」の順となっている。それ以外の人を頼りにしている比率も、男性、女性とも10%以下であり、「病気で数日寝込んだ時」と同様である。一方、ひとり暮らしの場合には、男性、女性とも「子ども」をあげる人が最も多いが、「近所の人」も25%から35%と多く、頼りにされている。また、一方では、男性、女性とも「頼める人」がいない比率が25%前後もあり、注目される。

図 25 心配事や悩みをきいてあげる人 (MA) —対象者の性別・居住形態別—

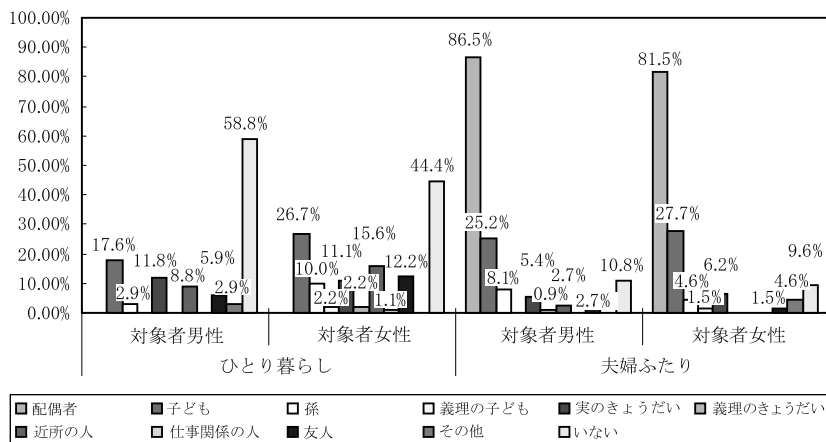


7) ソーシャルサポート（提供：providing support）

a) 心配事や悩み事をきいてあげる人

図 25 は、対象者の性別・居住形態別に、まわりの人々のなかに心配事や悩み事をきいてあげる人がいるかどうかを検討したものである。夫婦ふたりのばあいには、男性、女性とも「配偶者」が圧倒的に高く、次いで「子ども」の順となっている。男性では、「配偶者」と「子ども」との間では、大きな差がみられるが、女性ではその差はそれほど大きくはない。むしろ、「実のきょうだい」「友人」「近所の人」が相対的に多くみられ、日常生活を色濃く反映していると考えられる。一方、ひとり暮らしでは、男性、女性とも「子ども」「実のきょうだい」「近所の人」「友人」をあげる割合が「夫婦ふたり」の男性と比較すると相対的に多く、特徴的である。特に女性に「友人」をあげる人が多いのは、その生活が如実に反映されている。また、その一方では、男性の 29.4%、女性の 21.1%は、そうした「心配事や悩み事をきいてあげる人」がいないと回答しており、人間関係の疎遠な状況がうかがえる。

図 26 病気で寝込んだ時の看病や世話をしてくれる人 (MA) —対象者の性別・居住形態別—



b) 病気で数日寝込んだ時に看病や世話をしてくれる人

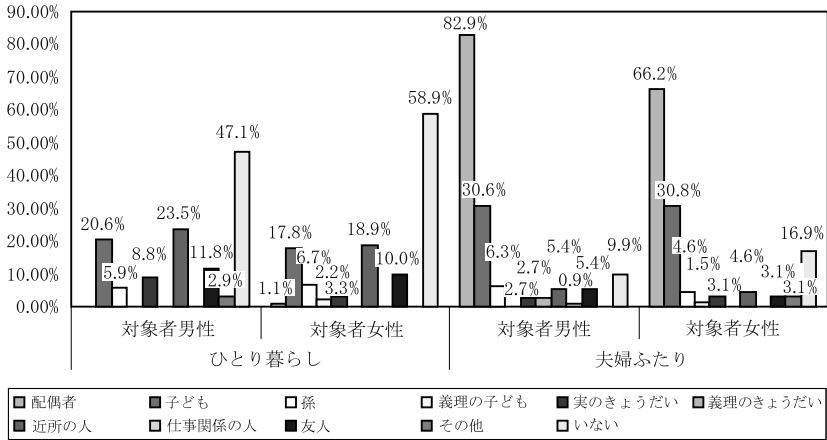
では、まわりの人々の中で、病気で数日寝込んだ時に看病や世話をしてくれる人がいるかどうかを、対象者の性別・居住形態別に検討してみよう(図 26)。

夫婦ふたりが健在である場合には、男性、女性とも「配偶者」が圧倒的に高く、次いで「子ども」の順となっている。それ以外の人を頼りにしている比率は、男性、女性とも 10% 以下である。「配偶者」と「子ども」以外は、それだけ、濃密な関係は、つくれないということであろうか。一方、ひとり暮らしの男性、女性とも「子ども」をあげる人が 18% と 27% ほど存在するが、夫婦ふたりの場合と同様、それ以外の方はそれぞれ 1 割前後でそれほど多くはない。むしろ、男性、女性とも世話をしてくれる人は誰も「いない」という比率がそれぞれ 58.8% と 44.4% と最も多く、そうしたかわりがない生活をしていると考えられる。

c) お使いや留守番などのちょっとした用事を頼まれる人

図 27 は、お使いや留守番などのちょっとした用事を頼まれる人がいる

図27 ちょっとした用事を頼める人(MA) —対象者の性別・居住形態別—



かどうかについて、対象者の性別・居住形態別に検討したものである。夫婦ふたりが健在である場合には、「ちょっとした用事を頼める人」と同様、男性、女性とも「配偶者」が圧倒的に高く、次いで「子ども」の順となっている。それ以外の人を頼りにしている比率も、男性、女性ともきわめて少ない。一方、ひとり暮らしの場合には、男性、女性とも「近所の人」と「子ども」をあげる人が最も多い。また、一方では、男性、女性とも「頼まれる人」がいない比率は女性が58.9%、男性が47.1%と圧倒的に多く、まわりの人々の中にはそうした人々はいないということであろう。

8) 要約と課題

これまでひとり暮らし高齢者及び夫婦のみ世帯の高齢者を対象として、大別すると、「高齢者の家族役割」と「高齢者のソーシャルサポートネットワーク」の結果について言及してきた。「高齢者の家族役割」については、男性（夫側）が行なっていると思っているほど女性（妻側）は認識しておらず、それが歴然とした差となって表れていた。家族生活が親子中心

大都市圏における子ども・孫・親戚とのサポートネットワーク

から夫婦中心へと変化してきている中で、こうした役割規範をどのように調整し、また分担していくかが今後の大きな課題である。

一方、「高齢者のソーシャルネットワーク」（子どもとの交流頻度）については、「子どもが高齢者（自分）の家に訪ねてきたり、子どもから誘われて一緒に出かけること」よりも「高齢者の方から子どもの家をたずねたり、子どもを誘って一緒に出かけること」の方が少ない傾向がみられた。また、「子どもと電話で話したり、メールでやりとりすること」は相対的に多く、子どもとの交流頻度を補完しているようにも考えられた。

ただ、その一方で、ひとり暮らしの高齢者、特に男性高齢者の一部には、子どもとの交流頻度も相対的に少なく、孤立している傾向もうかがえた。今後は2回目以降の追跡調査をした結果と関連して分析し、IADLと高齢者の自立生活やソーシャルネットワーク、高齢者の社会参加活動の状況等をもう少し詳しく検討し、その要因と対応策を課題としたい。

引用文献及び参考文献

- Antonucci, T. C (1990). Social supports and social relationships. In R.H.Binstock & L.K.George (Eds.), handbook of aging and the social sciences (3rd ed.,) Academic Press. 205-226
- Byrets, T. ,et.al., (1972) Houing, Gerontologit, Summer Part II, 3-10
- 神宮純江・江上裕子・絹川直子他 (2003) 「在宅高齢者における生活機能に関連する要因」『日本公衛誌』50 (2)、92-105
- 小林恵里香・杉澤秀博・深谷太郎他 (2000) 「高齢者の保健福祉サービスの認知への社会的ネットワークの役割—手段的日常生活動作能力による差異の検討—」『老年社会科学』22 (3)、357-365
- 国際長寿センター 『平成16年度高齢者日常生活継続調査研究報告書』2005年
- 古谷野 (1991) 「地域老人における手段的ADL—社会的生活機能の障害およびそれと関連する要因—」『社会老年学』33、56-67

- 森岡清美、望月嵩（1998）『新しい家族社会学』、培風館
- 西村昌記（2003）「高齢者の人間関係」古谷野亘、安藤孝敏編『新社会老年学』ワールドプランニング
- 野口裕二（1993）「高齢者のソーシャルサポート：その概念と測定」『社会老年学』No. 34、
- 奥山正司（1994）「家族の保健福祉的支援機能と高齢者」山口透編著『高齢社会への対応』高文堂出版
- Parsons, t. & Bales, R F. (1955), Family Socialization and Interaction Process
- 斎藤吉雄（1993）、「役割」森岡清美、塩原勉他編『新社会学辞典』有斐閣
- 柴田博・杉澤秀博・渡辺修一郎（2003）「日本における在宅高齢者の生活機能」『日本老年医学会雑誌』40（2）、95-100
- 山田ゆかり・石橋智昭・西村昌紀他（1998）「IADLの自立と遂行（1）」『老年社会科学』20（1）、61-65

なお、本稿は2005年度、東京経済大学個人研究助成費A05-04による研究成果の一部である。記して謝意を表したい。

